に見る寒さでした。四月八日長男一年生の入学式には行きましたが、その後授業はできたのかさだかでない。その頃から警報も頻繁になりつつあった。蚊口の宝酒造がやられたのもその頃だった。その日は一日防空壕にかんづめにされた事があります。里の両親が年寄り子供では高鍋は危ないかも知れぬから穂北に疎開する様にと荷馬車を曳いてよこしたので、誰にも言わず、こっそりと夜逃げ同然の夜の十二時に家を出ました。出ながらにしてこの家に二度とふたたび帰ってこれるだろうかと本当に断腸の思いだった。荷物と子供三人親とで車の中は身動き一つ出来なかった。母は赤ん坊を背負い馬車の後ろについて今の新富の十号線富田の八幡から瀬口までの道のりの長かった事を覚えております。薗元から妻の街の中、その頃街燈はなく道は真暗の中不気味だった。電気はおろか明かりと言えばランプだった様に思います。里の近くになって漸くして東の空が白み掛けて着いた頃に夜が明けた。心配して待っていてくれた母には子供を背負わせ夜道を歩かせすまない気持ちで一杯であった。それにもまして母の足腰の丈夫さには驚きました。私には到底真似出来ぬ事だった。母も孫子可愛さの余り精一杯頑張った事と思う。こんな母のお陰であの混乱の世の中を立派に成長して来れた事に今は亡き母に感謝しています。里に付いて三日目に皮肉な事に終戦。後三日待ったらなあと出かかったのをぐっとこらえ気遣ってくれた父母に申訳ないと思い、来てよかったと一人つぶやいたものでした。終戦になったものの港ではアメリカ兵が上陸して女子供はあぶないとあらぬ噂に悩まされたものです。戦後五十年元の平和な日本に返り有り難い事です。私は若い時から高鍋に憧れてました。なぜかなら父の弟二人叔父達が大正時代でしょうか昔の農学校当時島田校長

先生の時に学んだとの事、又、叔母は高鍋女学校を卒業したそうでよく高鍋の話を聞かされ、私を今の蓑江区の上蓑江にとつがせたのです。昔で言えば士族の出、主人八十二才で十代目だそうです。数へて見て三百年は続いている様です。高鍋に住んで五十八年になり此処が私の生まれた古里だと思ってます。昔から文教の地とも言われ伝統ある地に住む事を誇りに思っています。今後ますます高鍋が栄える事を念じています。

将棋の思い出

坂本　末澤　高夫

戦時中高鍋町坂本に無名の頃の大山康晴氏が縫工兵として内田今朝吉氏の宅に宿泊していたのです。大山康晴氏は岡山県倉敷市西阿知町に生れ小学校に入学の頃にはもう将棋をさしていたのですが次第に強くなり大人も勝てなくなり皆んなから神童と言われていました。

小学校を卒業すると大阪の木見八段の内弟子になりプロの道を進んだのです。兄弟子に枡田幸三と言って後名人にも成った良い競争相手にもめぐまれていたようです。私が大山康晴氏と出会ったのは岡山の部隊に召集で入隊して約一ヶ月ぐらいしてからです。我々は暇が多いので隊内でよく将棋をしていたものです。大勢集まりにぎやかにやっていると後の方で見ている兵隊が其の場をはなれて行くのです。其の後に二、三回そうした姿を見たので呼び止めて「お前も将棋が出来るのか」と聞くと「少しは出来ます」と言うので、それならやろうと盤を出して初めると私はあぐらをしているのにかれは正座をしているのです。差していて駒を取った時私は手中で駒を持て遊んでい

るのに相手は盤の横へ一枚づつ並べていて最後まで一言も言わないのですが強いので私が腹が立つほどでした。今度は別の人にやらしても勝てないのです。それで「お前は何をしていたのか」と聞くと「将棋」です、と言うので中隊の人事係に調べさすとプロ棋士大山康晴と書いて有ったので初めて昔の神童と言われていた人だなと思い、其の後は先生の様に教えてもらう様になった。この話が部隊にも広がり他の隊から試合の申込みが有るので行かして、点呼後に試合の様子を聞くと強いです。良い手をしているといって相手をほめていて決して強いなどと一度も言った事の無い人でした。其の内に部隊の編成替えが有り、私は鹿児島県へ出動した。その後高鍋町へ移動して見ると大山康晴も来ていたのです。その頃炊事係をしていたが高鍋には永くはいないで師団指令部付として移動した。指令部は妻町（現在の西都市）で高級将校と一緒の宿舎にいて毎晩将棋を教えていたのです。その頃は大山康晴氏は六段と聞いていました。終戦になり復員して次々と昇段して将棋の最高位になられた人です。

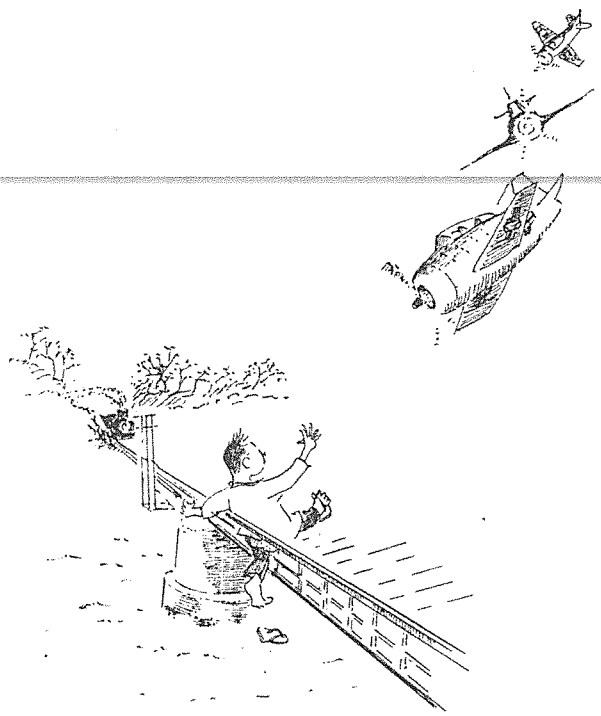
もう五〇年も前の事で思い出しにくく又書く事も苦手な者ですので、やっとの思いで書いて見ました。

小丸鉄橋（昭和二十年頃）

正祐寺　黒木　畩松

蚊口の駅と鴫野の間、小丸川口にかかる鉄橋を渡る人は多かった。長さ約九百メートル。汽車が来たら、よけ場によける。およそ六十メートル毎に十四のよけ場があった。私は戦時中この鉄橋を通って蚊口の駅から住吉に通勤していた。この鉄

橋の真中あたりを歩いていたら敵のグラマン戦闘機がやってきた。このままではまずいので下の中洲に何とかおりることができた、橋脚の大きなコンクリートをまわりながら難をのがれた。又夕方帰りに鉄橋にさしかかると、爆撃でこわされレールもたれ下がっていた。それを伝って下り、又上ってようやく通ったことも、戦争なればこそだろう。



○徴兵検査不合格

私は昭和十三年十七才の時急性盲腸炎で入院腹部切開手術を受けた。つづいて腹膜炎、腸捻転で何回も腹部切開した。運良く三ヶ月で退院できた。しかし二十才の徴兵検査では傷あとのため不合格になった。当時の事として残念涙をこぼした。軍隊に行けなかった代りに勤労報国隊として北九州の炭鉱で石炭堀りに頑張った。坑内は暗くて高温、危険度も高い、まっ黒によごれ、つかれも大きい。太陽の下できれいな空気を吸いながらの仕事なら何でもよいと思ったことを今もおぼえている。

又男手の少なくなった農村では女子青年月明馬耕隊が、夜、月の明かりで馬耕に活動した。

○満蒙開拓義勇軍

「僕も行くから君も行け、北満州の大平野、広漠千里果てもなく、無人の沃野君を待つ」の歌で開拓団の若者を送り出した。五十年前のことで

あった。終戦の頃ソ連軍の満州侵攻で現地の日本人は大変な目にあった。日本に引揚げるべく、途方もない道程を歩かねばならなかった。0才から四、五才の幼児が現地の中国人に預けられることになり、家族も別れ別れになり、肉親さがしで訪日されている、養育して下さった中国の人々に深く感謝している。

○特攻隊

敵の物量作戦に南方の日本軍の苦戦が続き特攻隊の作戦が実行された。戦闘機に一人乗り込み、爆弾をかかえ往きの燃料だけで敵艦に体当たりするもので、勝つために、若い命が次々に散っていった。その第一回特攻隊の中によく知っていた青年がいた。

遺書の歌に「南海の果てにこの身は果つるとも幾歳のちの春を思えば」とある。機会がある時は靖国神社に参詣しています。

ある盆踊り口説

蚊口上　三浦千賀

日向高鍋蚊口ヶ浦に
幼な子供が心中したと
云うが誠か不憫の沙汰よ
鯨橋より南の角に
角の娘にお菊と言うて
齢は十六まだ振り袖よ
お菊の馴染みに市次郎さんと
齢は十八まだ稚児桜
汲むに汲まれぬ底ぬけ柄杓
抜けてそのまま納戸に忍ぶ
これを見るよりお菊の母は
心づくしのお茶菓子などを
忍ぶふたりに差し入れなさる

この詩はずっと昔今の宮崎日日新聞が日向日日

新聞の頃、県内の盆踊り音頭が出ていた。その中に今の串間市にある市木、昔の市木村で語っていると載っていた。私の空おぼえで定かではないけれど、この先が心中に到るまで続いていたと思う。

丁度その頃、お菊さんの生家の何代目かのお嫁さんを知っていたので聞いてみると「そんな事が祖先にあったそうな」と言ってお墓まで連れて行って下さる。文字はながれて読めないけど石碑が二つぴったり寄り添っている。側に大きな松の木が二本並んで聳えていた。

その方は心中のいきさつ等詳しくは知らない様子だった。私は父母のお墓詣りをする度に近くだったので、そのお墓に行ってはお念佛を唱えあの詩の面影を想いながら心で話しかけると親たちの嘆きまで聞こえるような気がした。昔のことなら少し身分が高いとあの家からはと反対され、二人は立つ瀬がなくなり天国で結ばれる事を誓ったのだろう。

波音を近くに聞きながら清いふたつのみ霊は、永遠に睦み合っていることだろう。

最近、新聞を開く度に胸が痛む様な記事が必ず載っている。今の世相に馴染んでいる人達には毒にも薬にもならない語り草であろう。

でも今時の若者に煎じてのませたい様な、可憐な美しい恋物語りである。

そぼぐり

蓑江　坂本理一

昭和十三、四年頃、支那事変で日本が連戦連勝日の出の勢いの頃、私は小学校の高学年だった。

四時間目の終わり頃になると腹の虫が鳴き出す。カーンカンカン、カーンカンカン小使いさんの

鳴らす鐘の音、やっと昼食の時間がやってきた。最早や勉強は頭に入らない。「今日はこれまで」先生の言葉で組長が「起立」「礼」の号令をかける。

先生が教室を出て行かれると途端に、がやがや、がやがやみんな机の下から弁当を取り出す。

汁のにじんだハンカチを広げ、ふたを空けると、真中に梅干し、端の方にたくあんが四、五切れ、麦飯がぎっしり詰まった日の丸弁当。育ち盛りの我々にとっては、まずいご飯などとは全く思ったことはなかった。ただ、ただ有難いとむさぼり食った。

腹が満腹感に満たされるとみんな一斉に運動場に向かって走って行く。一日のうちで一番楽しい昼休みの休憩時間だ。わずか四十五分間だったが、当時子供の頃は、二時間にも三時間にも感じられた。グランドの芝生の上には下級生が一杯集まってくる。一つ下の学年のものはあまり集まって来なかったが、二級三級下の学年は、兄と弟、先輩と後輩と云った位置付がはっきりしているせいか、近づいて来る。親近感がある。

早速はじまるのがそぼぐり。そぼぐり。そぼぐりの語源はわからないが、犬や猫などの子供が寄るとさわると、上になり、下になり、軽く噛んだり、噛まれたり、じゃれあう、そうした行動（運動）を云った。

人間の場合は相撲になったり、柔道になったり、レスリングになったり、お互いに体と体のぶつかり合いの競技のことだ。こうした友達同志の体と体のふれあい、ぶっつかり合いこそが幼少期の人

間にとっては大事な体感教育の一つではなかろうか、体感を通じてお互いに強い精神的なつながり、友情が育まれる、そうした競技のなかで、強い者弱い者の序列ができてくる。そして強い者が、弱い者を助けていた。

だから今日問題になっているいじめにより破局を招くようなことは全くなかった。

学校教育も、教科書により学ぶ座学と同時に、もっと遊び方の教育を進めるべきだと思う。

運動場に出て、野っ原に出て、大自然の中でのそぼぐりを勧めることだ。少し位ズボンが汚れてもいい、やぶれてもいい、たくましく育てることだ。

今日では家庭生活の中でも、親子、部屋は独立し、それぞれの部屋には、テレビ、電話を入れ、顔を合わせるのは食事のとき位だ。その食事もまちまちで、一家揃っての団欒の機会はないのではないかと思う。

時代おくれの老人の苦言かもしれないが、そぼぐりを思いだしたので遊び方の教育、体感教育をお勧め致します。

水汲み田の思い出

川田　吉松　ハナ子

大正七～八年頃のことであります。私の生家は萩原で、生家の集落を大工町と呼ばれていました。十二～三戸の世帯が皆大工さんであり、家も揃って瓦葺きでありました。当時は茅葺きの家が多かった時代で、特に目をひいたのでしょう。私の家も大工が本業で、毎日仕事に出て行かれ、夕方も遅くなる時が多いようでした。

そうした忙しい日々でしたが、家族も多いし少

しでもと思われたのでしょう。田圃を作っていました。その田圃が水路のない所で、すぐ近くに池が在り、池の水を汲み上げて作っているので、面積も一〇アールたらずのものであったと思います。今頃のように早期水稲と違い、普通作であったので収量も少なかったと思います。雨の日を除いて毎日両親が朝食前の仕事として、水汲みに出かけるので、朝のしまいは長女の姉がしていました。私が小学校一〜二年生の頃で、私の登校準備まで姉が面倒を見てくれました。姉も本当に大変であっただろうと、亡き姉に感謝しております。

父も、ときたまに、今日は休日だからといって、朝食後に水汲みに行くこともあったので、私も一緒に行き、水汲みを見たり、「オタマジャクシ」をとったりして遊びましたが、水が田圃一面に行きわたるには大分長い時間がかかりました。両親は水を汲み始めると、回数を数えながら汲みます。その回数で、水のあんばいを判断するようでした。

水汲み桶は径三〇㎝位で、深さが二〇㎝位のものでした。お粗末な絵のようにして両親で汲んでいましたが、手に持っている操作棒の操りかたと、二人の息が合わないと、うまくいかないようです。引網と二人の間隔も大きく作用したでしょうし。

昔の人の知恵で自分で道具を造り、人間は斯う

して働くものだと、今日のような世の中が到来することは、想像もせず、只黙々と働いたのでしょう。

私も、十九才で全く体験のない農家に嫁いで、八人の子宝に恵まれ、いろいろと苦労難儀をしましたが子供達が皆、正常な道を歩いてくれて、本当に有難いと、感謝の日々を過しております。

後世に残す心の財産

蚊口　辻　直　子

昭和三十四年一月に結婚し、一ヶ月もしないうちに主人が病気になりそれから入退院を続けるうち、七年の歳月が流れ、どうせ戴いた身体なら、人のため世のため社会のためになる様なことをしたらと言って一念発起、十七、八の役職を引受け日夜、精進しているとき、子供も三人（女二人男一人）もうけ三番目の長男が五、六才のとき、うちのお父さんの職業はなんですか、いつも家に居り、何かある時出て行き一日中働くことなく、何をして居るんだろう。と私に言います私は子供に何と言って説明したら良いかと、思いついたのが「今お父さんは、一生懸命働いているよ、そのお金は天の倉にどんどん積んでいるのよ。子供達が大きくなったら使えるお金よ。」と言ったら不思議そうに天を眺めますが、倉が見えません、大きくなったら見えるんだねと言って、そのまま時が流れました。

小学校五年、六年の夏休みのとき体験学習で、幼少年団参と言って親元をはなれ心の勉強のため、参加させてみました。その参加によって、ボランティアとか、徳を積む事をアニメにしたものをみて父親のやっていることが、本当に大切なことだ

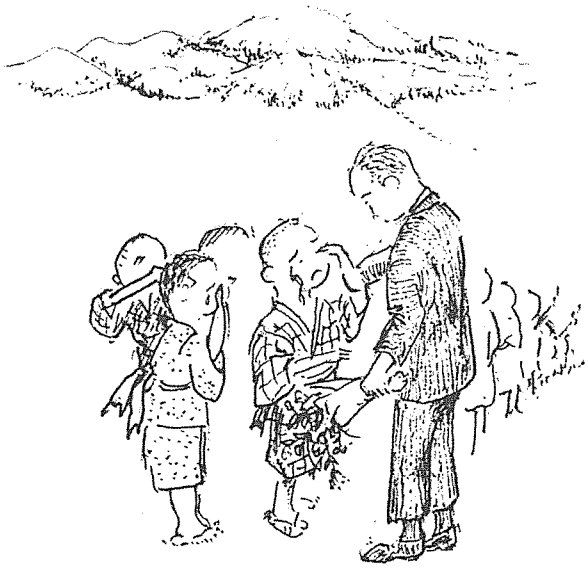
と思ったのでしょう、参加から帰るがいきなり、お父さんて偉いんだね、でもそれをさせているお母さんは、もっと偉いんだよ、子供が、そう言ってくれたとき私はこんなにうれしかったことはありません。それ以後何かにつけて、親思いの態度、親の身になって言葉を言ってくれて以来十数年が過ぎ、それぞれ社会人になり、立派な伴侶を得、子供にも恵まれ三人の子供達も家を新築するやら、マンションを購入するやらで親以上にリッチな生活も出来ています。私共は一人は、社会奉仕、人の役に立つことをすれば心は豊かな人生は勿論、子供達は親の後姿を見てやってくれるんだとつくづく思います。秋の町議会議員の選挙に立候補するにあたって、前々回八年前落選して以後病に倒れ再起が出来ないかと思っていたら、昨年から娘婿が、お父さんは議員が一番性にあっている、どうか立候補してもう一度地域社会のために役立って下さいと言って、私の子供達三人夫婦が、費用分のお金を連名で名前を書き、父親に差し出しました、親が子供達に言ったわけでも、頼んだのでもない、子供達が良くても伴侶が反対すれば話しにもなりません。それが三夫婦が全員一致で、「親孝行が出来るからこんな嬉しいことはないと、よろこんで差し出してくれました。昨今親からどうして取ろうか、又何と言って貰うかと欲のことばかりよく耳にしますが、子供達は物や金でなく社会奉仕をどうかしてください。それで子や孫に徳分を積んで下さい。親のあとに続きますと云ってくれます。お金や物では絶対に買えない心の財産を作ることを子供から言ってくれる。又親は子孫に遺こして行く、これこそが最も大切で子供達も親の足あとを踏んでくれるものと確信しています。

恩師を見送って

川田　中村　博

大正十二年四月、上江尋常高等小学校に入学し、人生第一歩の先生は、鬼塚高徳先生でありました。

今は亡き先生のごめい福をお祈り申し上げて、先生を、しのびたいと思います。一年間受け持って頂いたので、いろいろと多くの思いはありますが、省略させて頂き、先生の面影と、お別れする時の思い出として、先生の髪は丸刈りで、前頭部は少々髪が薄くなっておられました。概算して見てまだ四十才余りであったようです。怒られたお顔を見たことがなく、又そう際立ってお笑いになることもないけれども、親しみ深い先生であったことが印象づけられております。大正十三〜四年頃であったと思います。川南か都農方面に転勤されることになり、全校生徒であっただろうとおもいます。小丸橋（当時は木橋で昔の国道であります）まで見送りに行きました。先生の他に二人おられて三人ご一緒に転勤されたのでしょう。整列した生徒の前を手を挙げたり、頭を下げたりして、歩いて通られ、私共のクラスの前で一寸止まって、勉強をするんだぞ、大きくなるんだぞ、と奥歯をかみ締めるようにして行かれたのが又印象的でした。



橋のたもとまでいかれると、万才をしてお別れで

したが、三人の先生方は歩いて橋を渡られました。
まさか歩いて川南、都農まで行かれることはあるまいし、橋の向こうに馬車でも待機していたのだろうか？当時は客を運ぶような自動車は無かった時代で、乗り物といえば、馬車、人力車、勿論日豊線を汽車は走っていました。自転車も珍しい時代で子供の頃は、親達によくいわれました。道に出ると危ないよ、自転車が通るからといわれたものでした。全く今頃の子供には想像も出来ないでしょう。又その日は尾鈴連山はふもとまで、西方の奥地深く真白な雪景色でした。年間二～三回はこんな雪が積もらないと春は来ない。と、いわれた程に、その頃は寒かったのでしょう。
それでも子供達は素足にわら草履でした。着物も短い裾にじゅばん一枚で「ノーパン」が多く、鼻垂れ小僧が多かったのも、服装が原因でもあったかと思います。子供は、「風ん子」といわれていましたが、あんなに山は雪であった日でも、あの日は寒かったなーと、いう思い出は残っておりません。その後も何にかと先生を想うこと再々でした。やがて学校を卒業し、就職、兵隊、戦争、満州、シベリアよりの復員が昭和二十四年末でした。そして二十五年の正月奇遇と申しますか、道具小路の親戚が取り持つ縁で、二十五～六年振りに、先生にお会いすることが出来て、大変お懐かしくお話しを承り、三時間位お邪魔致しましたのが最後でありました。

下宿

道具小路南　原　郁

私は昭和十六年の始めから道具小路で暮らしました。その頃外地では戦争が益々激しくなって居

ましたが、まだ高鍋あたりは穏やかな日々が続いていました。近所隣つき合いは親密で何か用事で顔を合わせると、直ぐ縁側でお茶飲みが始まりました。

その年の十二月、日米戦争が始まりその頃から少しづつ慌しい空気が流れはじめました。昭和十七年から十八年にかけてだったろうと思います。新田原の一〇一部隊の将校さん方が下宿しました。だんだん部隊の増強されて行ったのでしょうか、役場からの達示で少し家の広い所では皆下宿をしなければなりませんでした。

私のうちでも表の間に一人置く事になりました。はじめの人は左市大尉と云われました。軍人らしい体格の良い人でしたが、おとなしいごく普通の感じの方で、金の入れ歯が澤山あって口元が賑やかな人でした。二、三ヶ月もすると道具小路の北のはずれに町の商家の人が建てられた借家が出来上ってそこへ越して行かれました。その次は中尉さんでした。まだ士官学校を出て、二、三年の若い人です。桧さんと云ってこの人は中々特徴が有って家族皆が気に入っていました。毎朝起きると直ぐ氏神様の前で姿勢を正して、軍人勅諭なるものを読まれます。大島の袷一枚で兵児帯を木登りにチョコンと結んで何ともほほえましい姿でした。性格も帯の結び方のように気取りのない素朴な人でした。お休みの日は、囲炉裏端で姑(ハハ)を相手に熱心な話が始まります。あとで母が笑い乍ら言っていました。「色々作戦の話を一生懸命してくりゃるけど、何が私にわかろか、けど分かったふりして一生懸命聞いて上ぐっとよ。」と……。母は聞き上手でした。その頃の一番純粋な若い軍人さんの姿だったかと思います。お父さんが大阪から一度面会に見えました。桧さんそっくりの小柄で真面目そうな方で、小さな工場を経営してい

るとの話でした。息子さんの事が大変気になっておられる風でした。桧さんも一年はおられずやがて戦場へ転出して行かれました。

下宿の仕事は、主に食事の世話でした。母と二人で折々献立を立て、料理は専ら私が作りました。何か事が有る時は母が腕をふるいました。どんな大きい魚でも忽ち、みごとなお刺身や吸い物に早変わりしました。食料品もどうにか不自由しない位に有ったように思います。桧さんの後には木水中尉が来られました。福島の温泉宿の息子さんだという事で、明朗活発で余り遠慮されない方でした。お風呂に入って大きい声で軍歌を歌われるのです。その頃まだ私の家は少し封建制の残ったような静かな家風でしたので皆一寸ビックリしました。となりの叔父さんのうちにも、大尉殿が下宿しておられ、お互いに行ったり来たり、又当番兵の人が出入りしたり何となくざわめいて居ました。

南隣の借家には主計大佐の高椋さんがおられました。その裏庭から時々奥さんの華いだ声が聞こえて、何でも後妻さんで若いのだという噂が流れてきました。そして東隣には軍医少佐の資産家が貸家として建てられた大きな立派な家でした。葛城さんは京都の華族の出とかいう事で堂々たる体格の謹厳で一寸近寄り難いような人でした。その奥様は又反対に非常に人なつこくて、裏口からヒョロヒョロと出て来ては私共と気易く長々とおしゃべりされました。今でいう八等身美人でいつも帯をキチンと結んでモンペ姿の私共とは対照的でした。海軍士官の家庭に育たれたとかで非常に自由な雰囲気を持っておられました。道具小路でも、その他いっぱい若い将校さん方が家を借ておられ町には偕交社も出来てそんな方々が出入りし、町中兵隊さんの帯剣の音が聞こえて来るような時代でした。

最後に私のうちで下宿したのは武田少佐殿でした。落下傘部隊の隊長さんです。口髭をはやして、小兵（ヒョウ）乍ら非常に磊落で豪胆細心といった武人の典型の様な方でした。うちの家族ともよく馴染まれ殊に父と話が合いました。父も日露参戦の勇士でしたので通じ合うものが有ったかと思います。余り長い間お世話しなかったように思いますけど、どれ位おられたのかやがて戦地の方に行かれねばならぬ事になりました。奥様も名古屋からまだ乳離れしない小さい嬢ちゃんを一人連れて急いでてこられました。

ささやかな出立の宴をはって皆で賑やかくお送りしました。どこかへ落下傘部隊として作戦に参加されるということでした。ずっと後で分かったのですが、有名なパレンバンの落下傘部隊が武田さんの率いる部隊だったのだそうです。もう戦況もだんだん落ち目になって居た頃のように思います。奥様は大柄でゆったりした方でしたが慌てず騒がずに御主人を送り出されたあと、片付けが済むと静かに帰って行かれました。新田原から川南の各地に訓練中の落下傘がパッパッと次々に開きキラキラと輝いて降下して行ったあの光景が今も夢の様に思い出されます。

武田少佐が征かれたのが何時だったかはっきりしないのですけど、そのあと頃からだんだんと戦局も厳しくなり、防空頭巾を作ったり、防空壕を掘って貰ったり、そしてそれに入ったり出たりし乍ら終戦に向かって不安な日々を

送って行ったように思います。

ふる里の追憶

道具小路南　原　亥一

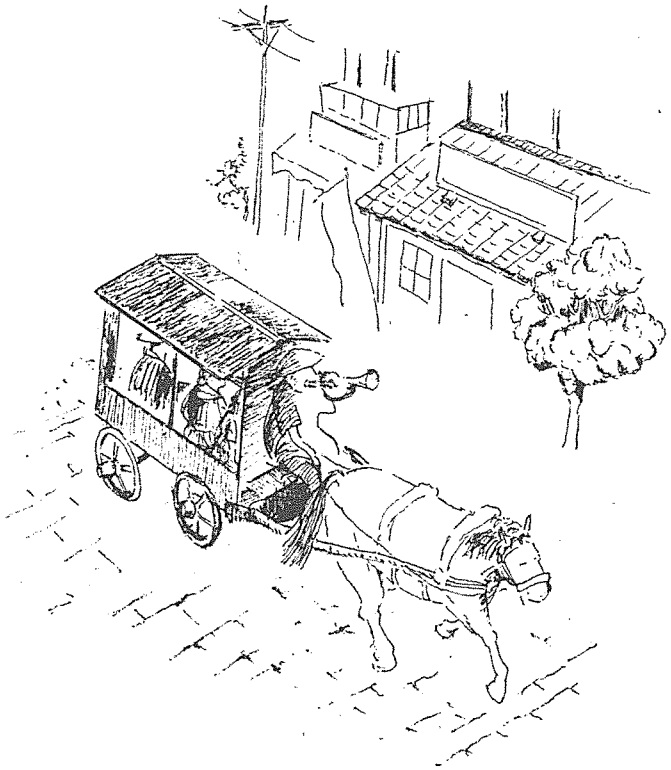
明治うまれの老人が過ぎし子供のころのふる里のことどもを思い浮かべ『国やぶれて山河あり』といった大戦後のあわれな時代をみごとに乗り切り今日の経済大国にまで発展した現代とをくらべて見ると経済的にも精神的にも誠に感がい深いものがあります。小学校の頃は数冊の教科書と学用品を持って登下校し、家にかえれば、縁側や机の上にそのままほり出して川や山に夕暮まで遊び回るのが、男の子の普通の日課でありましたが、女の子はそういうわけにはいかず数多い兄弟の世話や家事の手つだいをさせられるのがおおかったようです。今のように女性が自動車を乗りまわす時代と異なり、女の子が自転車などに乗るのはもっての外のことでした。今の様に進学するのもほんの一部で高鍋にも農学校や町立實科女学校があり同校の卒業生も今八十九才のおばあさんで今も元気な方々も多いと思います。高鍋に中学校が出来たのは大正十二年で私が小学校を卒業した年でそれまでは宮崎、延岡、都城等遠かくの地にしか中学校はなく仲々進学するのは困難でした。

高鍋中学校は設立時は私立で児湯東部七ヵ町村で之を設立したもので、今の高等学校の前身です。設立時の敷地は一面の桑畑や砂糖きび畑で第一回生として入学した自分等は敷地造成の手伝や運動場造りに汗を流したものでした。思うに一般の子供は小学校どまりで実社会に出る事が多かったので児湯地方の先輩父兄が子供の教育の為に努力して設立して下さったものです。

私は道具小路生まれの高鍋ッ子で子供の頃は自然豊かな城下町で市街といっては今の本町通りで下町から小丸に至る一筋で今のしんきん通もなく東町も横町から道具小路までは水田で人家はなく、よく人魂が出ると聞かされて夜道はこわい道でした。娯楽施設としては町の裏通りであった記念館通りと今のカトリック幼稚園の南側に大正座といった芝居小屋があり、のちに東町の今のスーパーサンライフのある所に舞鶴座と云う映画館がありました。時たま町の祭日等には適当な広場に丸太組の大きなサーカス小屋が出来てにぎやかに楽器をならしてにぎわって居ましたが、興業が終ると又さびしい広場となって居ました。

太平洋戦争以前は舞鶴神社、火産霊神社、八坂神社と祭は誠ににぎわってたのしいものでした。

大正の中ばに小丸川河口に当時九州では二三番目に長いときいて居た鉄橋が出来て日豊本線が全開通して高鍋もその恩けいによくする様になりました。町から蚊口の駅までは乗合馬車が走っており鉄輪の馬車で石ころ道をガタガタと走っており駅者の吹くラッパの音が今だに耳ぞこに残っています。道具小路も昔からの人家が六、七十戸も



あったでしょうか鍛治ドンクジ、下ドンクジ、上ドンクジ、ちゅうげんクジ、具足クジ等と区名がありましたが、今は昔あった家もこわされてあまり見かけることも出来ません。鎮守の神多賀神社（デジョゴンサ）とよんでいましたが祭日にはうじこ家の門口には御神灯と書かれたアンドンが各戸にかかげられ各家ではご馳走を作り遠く親せきや知人もよばれ大変賑やかなものでしたが戦後は全くなくなりました。この多賀神社の廻りは今の都原精米所付近の集落がある所は原野で秋の頃はガチャガチャ（くつわ虫）チンチロリン（松虫）等の虫を取って遊んだものでした。神社と今の東小学校とのあいだは水田で中央に池があり夏はハスが繁り花をつけ冬には鴨が飛来していた土地の人はここをシタン池とよび魚釣り等たのしい遊び場であったが今は埋立てられて住宅地になってしまいましたが、幼いころのなつかしい所の一つです。高鍋は昔は養蚕が盛んで桑畑が澤山あり製糸工場も高月宮越にあり今の町役場は高月の製糸工場に建てられています。又気候も温かいせいか砂糖きびも澤山作られて砂糖搾りも行われておりきび絞り道具小路にも多賀神社の北隣に砂糖を作る所がありきび絞りや煮込みをしており遊びに行っては熱い煮汁を飲まされて舌をやいたのをおぼえています。きびの絞りかすは風呂わかしのよい薪でした。

水清く瀬あり渕あり水量も豊かであった小丸川も上流にダムが出来、鉄橋が出来るまでは河口はよい漁港であったようで多くの漁船が出入し今の宮田川の河口の水門付近に千石船が停泊しているのを見に行った覚えがあります。子供の頃は蚊口浜ではほとんど水泳はせず、小丸川がもっぱら、かっぱ連の遊び場で稲荷神社の下の川辺は大勢の子供の遊泳場所でした。今は護岸工事が進み人工

の川といった感がします。高鍋も各集落を結ぶ道路は改良拡大され廻りの田圃も家並の続く町なみとなり、幼時と現在との変わりように感深いものがあります。

大将軍池（デジョゴンイケ）の思い出（鯰（ナマズ）釣り）

道具小路南　原　誠

私達が住んでいる道具小路に大将軍池（通称デジョゴン池）という池があった。

場所は、現在の郵便局より北へ約二〇〇米位いった処で、現在の「わかば保育園」から警察宿舎までの西側で巾三〇米位の長円形をしていた。

当時東小学校の西側はすべて水田でその真ん中にあったわけである。

此の池より南に巾約三〜四米位の溝が流れていて宮田川に連なっていた。

此の池も土地開発の為に埋立てられ、今では住宅地になっている。

溝も鶴病院西がわ排水溝になりすべてコンクリで囲まれ昔の面影は全くない。

此の池と溝が、私達の幼い頃には絶好の遊び場で特に魚釣りには忘れられない思い出の処である。

池には蓮が生えており、又岸の土手には菖蒲も生えていて五月の節句にはよく取りに行ったものである。